

【表現学関連分野の研究動向】

認知言語学

野村 佑子

ここ数年の認知言語学の動向について、認知言語学のこれまでの知見を整理し根本的に問いただすことと、その知見をより具体的に生かすことの2点が言及されてきた。これらは、実際に、認知言語学の歴史的・学問的背景を丁寧に解説し、関連分野に対し知見を示した『言語学と科学革命』（山梨正明著、2021年、ひつじ書房）や、活躍する研究者たちがそれぞれの研究活動の最新の知見をまとめた『認知言語学の最前線』（児玉一宏・小山哲春（編）、2021年、ひつじ書房）の出版に見られるように、認知言語学分野において注目された良書の中で、実現されてきた。本稿では、その後、2022年にどのように展開していったかについて、1冊の大作を中心に挙げながら述べる。

『認知言語学の未来に向けて』（菅井三実・八木橋宏勇（編）、2022年、開拓社）は、33本の論稿が納められた、大規模な一冊である。本書では、認知言語学が実際にその知見を生かして他分野とも協働できることが、実例をもって示されている。池上嘉彦氏の「言語横断的に見た日本語動詞『なる』の生態（中間報告）」と山梨正明氏の「文学表現における描写の諸相—自然描写・情景描写を中心に—」を「巻頭論文」として始まり、「形と意味」（第一部）、「ことばの意味」（第二部）、「ことばと心」（第三部）、「ことばの振る舞い」（第四部）、「ことばの姿」（第五部）と5部で展開されたのち、最後の第六部「回顧と展望」で締めくくられる。納められた論文は、読者に、特に言語の研究をする者に、言語表現が意味を持つ様を多角的に検討することの面白さを改めて感じさせて魅了すると同時に、そのトピックや分析の観点の多様さから、今後こうした研究が積み重なることで、認知言語学が学際的に発展することを期待させる。言語研究者だけでなく、他領域の研究者による論文も掲載されており、実際に認知言語学が医学、神経心理学、情報工学などの他分野との共同研究が可能であることも示している。

また、2022年は、日本認知言語学会が、若手や中堅の研究者を主な対象とする「チュートリアル」を開始した年でもあり、第1回は辻幸夫氏と佐治伸郎氏が講師を務めた。チュートリアルでは、辻氏が認知科学としての言語研究の学際性について、佐治氏が認知科学と認知言語学のアプローチの共通基盤についてを中心に、参加者に向けて講義を行った。特に、研究対象や分析方法を「言語学の範囲か否か」で限定せず、他分野の研究者との共同研究を積極的に進めることについても言及があり、このことは、認知言語学やその関連分野の研究者たちが、今後自身の研究において重要となる基本について学びつつ、発展の方向性として学際性を重視することの魅力を改めて知る機会となった。

以上から、認知言語学分野は今後、より具体的に他分野と関わりを持ち、可能性を広げていくことが期待される。

(順天堂大学)